



大塚麻美、ステップス二度目の個展である。支持体の和紙を線香で焦がす方法は、前回同様である。しかしこの方法はあくまでも画面を実現させる為の一部であり、燃やすことの主張を強く打ち出すことはない。

古来、様々なアーティストが素材に工夫を凝らしてきた。雨風に晒したり土に埋めたりして支持体を風化させ、火に投じて燃やしたり変形させたりもした。水を投じて変化を生み出す場合もある。

ヨーロッパではナチスの蛮行以後、絶滅収容所を想起させるので、土葬を希望する場合が多いとJ・デリダの弟子である鶴飼哲から聞いたことがある。すると水を使う作品やパフォーマンスの意義が新たに生まれる。

大塚のように「和紙を焦がす」というのも、実は非常に日本的な感覚に満ち溢れている。焦がした時の香りを想起させるのである。大塚の意図と全く別の場所に批評が生まれる。更に私はその香しい香炉と、特に山という自然の空気感の融合を感じるのである。それは《信貴山縁起》などの古画を思い起こすのかも知れない。

すると今回の大塚の作品群のタイトルを見ると、総てが「山」と関連しているのである。大塚が描き出す山々は何れも抽象的様相を呈していて、何処の山であるという具体的な感触が生まれない。

大塚にしてみれば具体的な対象が存在するのかも知れないが、私にはそれが感じられない。具体的な場所があれば良いのか悪いのかといった議論ではない。大塚が時間と場所を超越して「山」を描いていることに意味がある。

そして重要なのは、それぞれの「山」に、独特の雰囲気が生じている点にある。作品だけUPで見ると、上記図版のようにある程度引いて、作品を取り巻く全体像として眺めたほうが、大塚の作品はより深く理解することが出来るのである。小品も同様である。大塚の今後が楽しみだ。

